

「全鍍連」 2018年 5月号 巻頭言

全鍍連 情報・国際委員長 山崎 慎介（東新工業(株) 代表取締役社長）

「第四次産業革命がやってくる」



日本では年間約3万件近くの企業が休業・解散しているそうで、倒産件数は8000件程度だから、世の中では潰れる前に事業を畳む経営者も増え、また事業を売却するなどの中小企業のM & Aも増加傾向にあるとのこと。

我々めっき業界の現状はどうでしょう？私が大学を卒業した昭和56年には、全国で3000社以上有っためっき屋さんは、今や1300社も割り込もうとしています。しかしある意味、我々の目の前にはチャンスが到来しています。

AI、IoT、そして車のEV（電気自動車）化に向けて、2015年あたりから、100年に一度の産業革命の訪れと言われています。一例として、今までは考えられない業界からの参入を目指す動きも顕著になって来ており、スティック型コードレス掃除機で有名な英国のダイソンが、2020年のEV車参入に向けて投資を拡大している。17年度に費やした研究開発費は週あたり700万ポンド、日本円で毎週10億円、18年度はこれを週あたり800万ポンド、日本円で年間500億円以上の開発費を投じ、電池からモーター、車体まであらゆるパーツを自前で設計・開発すると発表している。米ステラのように量産立ち上げで難航もしている例もあるが、いずれこの流れは止めることが出来ないと言うことは歴史が物語っています。

この100年に一度と言われる大変革、第四次産業革命と言われる時代の大変革をピンチと取るか、チャンスと取るかで、この先のめっき業界の未来が決まると言っても過言ではありません。今後のAIの技術の進捗や、IoT技術の導入によって、過去の産業革命の時と同様に消滅してしまう仕事も出て来ることでしょう。車のEV化によって、現在受注している部品がなくなることも予想されますが、それに代わる新たな部品も大量に必要になってきます。

第一次産業革命は蒸気機関の発明による人手作業から機械化へ、第二次産業革命では電気エネルギーの発明による大量生産時代に、第三次産業革命ではコンピューターの発明による自動化へ、その度に大きな変革が訪れ、なくなる部品も多かったものの、新たな部品を生み出し、めっき業界はその時々をサポートインダストリー産業として発展してきました。今般の第四次産業革命は、IoT産業革命+自動車のEV化と、我々業界ばかりの話ではありませんが、ある意味で産業革命が起こることは大きなピンチでありチャンスです。

後継者問題やら複雑な問題が山積の世の中で、残念ながら時代の変わり目まで辿り着くことが出来ずに、1300社まで減ったこの業界ですが、全鍍連を中心に情報収集に努め、部品やめっきの種類は変わっても、絶対になくなることのないめっきの世界を守って行きましょう。